

「中華なき辺境」の宗教性

1・辺境人の宗教性

「外部に上位文化がある」という民族誌的信憑は靈的成熟にとって「両刃の剣」である。おのれの理解も共感も絶した知的境位を「外部」に設定する心的態度は宗教性の基盤である。だから、おのれの位置をまず「辺境」と位置づけ、靈的位階のはるか彼方を外部に仰ぎ見ようとする辺境人的態度はすぐれて宗教的であると言うことができる。(…)

辺境的宗教性の美質のおそらく最良のものは宗教的寛容である。これをヨーロッパ世界は恐るべき数の屍骸を積み上げた後にしか達成できなかったが、日本人が宗派間の対立で殺し合ったという事例は歴史上ほとんど存在しない。

もう一つ、養老孟司は「辺境はインターナショナルであり、中華は田舎である」という名言を吐いている。出自の知れぬさまざまな文物が混在しているせいで多様性が確保されるのは中華の中心都市ではなく、むしろ辺境の街の方である。外部から到来する文物に対する原理的な「ガードの甘さ」もまた、辺境の手柄の一つに帰すことができるだろう。

しかし、辺境的宗教性には固有の欠点がある。

それは辺境人がその自己規定からして、おのれの靈的な未成熟の理由をややもすると「中心」からの空間的隔絶として観念する傾向にあることである。(…)

この「辺境性」は日本人に深く血肉化しており、おそらくそれゆえに、今まさにこの場において靈的成熟が果たされねばならないという緊張感を持つことを私たちの文化はその成員に必ずしも要求しないのである。

靈的成熟はどこかの他の土地において、誰か「靈的な先進者」が引き受けるべき仕事であり、私たちはただいづれ遠方から到来するであろうその余沢に浴する機会を待てばよい。そういう「辺境人の気楽さ」が私たちの宗教文化には深く致命的に浸潤している。それは無神論者の傲岸や、原理主義者の狂信よりはるかに穏当なものであり、私はそのようなわが国の宗教文化の「ゆるさ」を愛している。それはわが国の宗教文化の際だった民族的美質だとも思う。けれども、それが代償として、ある種の宗教感覚の発達を阻んでいることは認めなければならない。

私たちに欠如しているものがあるとすれば、それは端的に言えば、時間的表象形式のうちで超越者をとらえようとする精神的態度のことである。もはや存在しないもの(あるいはかつて一度として存在したことのないもの)に触れられる経験を記述しようとする

(ユダヤ人たちを二千年にわたって苦しめてきた)あの知的努力のことである。(内田樹、「辺境人の宗教性」、2007)

2・述べて作らず

孔子が治世の理想としたのは周公の徳治である。けれども、孔子もその同時代人もちろんその治世を現認したわけではない。孔子の時代の魯の国において、周公の治績はすでに忘れ去られようとしていた。孔子はその絶えかけた伝統の継承者として名乗りを上げたのである。その消息について白川先生はこう書いている。

「過去のあらゆる精神的遺産は、ここにおいて規範的なものにまで高められる。しかも孔子は、そのすべてを伝統の創始者としての周公に帰した、そして孔子自身は、みずから『述べて作らざる』ものと規定する。孔子は、そのような伝統の価値体系である『文』の、祖述者たることに甘んじようとする。しかし実は、このように無主体的な主体の自覚のうちにこそ、創造の秘密があったのである。伝統は運動をもつものでなければならない。運動は、原点への回帰を通じて、その歴史的 가능성을確かめる。その回帰と創造の限らない運動の上に、伝統は生きてゆくのである。」(『孔子伝』、中公文庫、2003年、115－116頁)

「述べて作らず、信じて古を好む」(述而篇)という構えのうちに、共同体の伝統の「創造的回帰」の秘密はある。「起源の栄光」なるものは、「黄金時代はもう失われてしまった」という欠落感を覚える人によって遡及的に創造されるのである。「周公の理想的治績」のおそらく半ばは孔子の「作り話」である。孔子のオリジナリティは「政治について私が説くことは、私のオリジナルではなく、先賢の祖述にすぎない」という一歩退いた立ち位置を選択した点に存する。(内田樹、「白川静先生から私が学んだ二三のこと」がら、2007)

3・中華という空虚

中心に中華があり、周縁には北狄・南蛮・東夷・西戎が散らばっている。北狄は北方の異民族である突厥、匈奴、鮮卑、蒙古、回紇など、南蛮はインドシナ半島の住民、東夷は東方の異民族だから、日本人もこれに含まれる。西戎はチベット系、トルコ系の異民族。狄・蛮・夷・戎はいずれも「えびす」と訓じる。要するに王化に浴さぬ野蛮人である。これが中華思想から見た異民族のイメージである。けれども、「狄」とか「奴」とか「卑」とかいうカラフルな漢字からわかるように、この「えびす」たちは「人外」とみなされている。王化の同心円の境界線のところにどっちつかずに遊弋している「化外の民」である。そこには「王化が及ばない」ということは現事実として認められているのだけれど、それは「あいつらは野蛮人だ」という事実認知的な言明にすぎず、「だから教化せねば

ならない」という遂行的言明を論理的には導かない。教化してもいいけど、別にしなくてもいい。そこまで中華の開化の光を届かせてもいいけれど、別にそれは中華たる漢民族の義務としては観念されていない。(内田樹、『街場の中国論』)

4・日本的靈性 相対的辺境性と絶対的辺境性

浄土往生は手段で、悟りが目的なのである。そうしてその浄土へ往くことができるのは、弥陀の他力によるものなので、業に囚えられている身ではそれができぬ。絶対他力で超因果の世界を体認しなければならぬ。「浄土」教というので、何もかも浄土で終わりを告げるように思うが、そのじつ浄土はそんなところではなく、一時通過すべき仮の駐車場の待合室みたいなものである。(…)純粹の他力教では、次の世は極樂でも地獄でもよいのである。親鸞聖人は『歎異鈔』でそう言っている。これが本当の宗教である。(鈴木大拙、『日本的靈性』、岩波文庫、56－57頁、強調は引用者以下同じ)

此の土の延長である浄土往生は、あってもよし、なくてもよし。光の中に包まれているという自覚があれば、それで足りるのである。(…)此の世が苦しいから彼の土へ往きたいというのは、真宗の本義ではない。(同書、59頁)

5・絶対的辺境性の「機」

剣を把って立ち会うというのは命のやりとりになるのだから、一刻も自分を忘れなどしたら、命丸出しになる話でなければならぬ。危険千万な心がけである。ところが実際の上では、自分のことを考えていると、そこにそれだけの隙が出てくる。ちょっとした隙でも隙が出れば、そこに相手の剣を招くことになる。それで命を落とせば事実上自殺したのである。剣力上の試合は電光石火で、「私」を容れる余地がない。ところが、命の取合いという際どい間際に自分をどうして忘れうるか。ここに人間心理の機微が窺われるのである。(鈴木大拙、『東洋的な見方』、岩波文庫、57頁)

石火の機と申す事の候。石をハタと打つや否や光が出で、打つと其のまま出る火なれば、間も隙間もなき事にて候。是も心の止まるべき間のなき事を申し候。(…)たとへば右衛門とよびかくと、あつと答ふるを不動智と申し候。右衛門と呼ばかけられて、何の用にてか有る可きなどと思案して、跡に何の用かなどいふ心は住地煩惱にて候。(澤庵禅師、『不動智神妙録』、『日本哲学思想全書第十五巻』、平凡社、1957年、13頁)

この「飛び込み」の体験を「横超」とも「飛躍」とも「直入」ともいう。そのほか、いろいろの名がある。つまり崖の上に立って、底も知れぬ谷の中に飛びこむことなのである。無限に虚なるものを見て躊躇することなく、その真只中に飛びこむことである。これを知的に表現すると「悟り」ということになる。いわゆる禅者の「見性」である。東洋人はこの悟りの経験なるもののあることを、実際自分で経験しなくとも、聞き伝えなどで、知っている。これが強みである。西洋には、この悟りに相当するいい言葉が見当たらず。(鈴木大拙、『東洋的な見方』、173頁)

6・辺境人の地政学

Japan, the Chinas, and the Koreas will be able to form a bloc easily because they share many features that blocs must have to work smoothly. They are all in the same region, and they share common religious, historical, linguistic, racial, and other cultural features which set them apart from all other countries and regions. (···) This will be hard for the Japanese to adjust to. As a culture, they are not used to relating to others **as equals**. (···) Japan, a reunified China, and a reunified Korea will be equal partners in Confucio community. China, however, because of its historical experience as the leading “**middle kingdom**” of the region, may take the leading political role, somewhat like the role France plays in EU. (···) **Japan will be the key country in forming Confucio. The way Japan reacts to the changing political situation, especially to changes in its relationship with the United States, will lead directly to the formation of Confucio.** (Lawrence Taub, *The Spiritual Imperative*, Clear Glass Press, 1995, p.119、強調は引用者)